

2) 広汎子宮全摘術における卵巣温存症例の検討

石井 桂介・青木 陽一
高柳 健史・常木郁之輔
倉田 仁・倉林 工 (新潟大学)
高桑 好一・田中 憲一 (産科婦人科学教室)

【目的】子宮頸癌に対する広汎子宮全摘術における卵巣温存症例の術後の卵巣機能を検討した。

【方法】1988年1月から1998年5月までに当科で広汎子宮全摘術を施行した子宮頸部扁平上皮癌Ⅰb期、Ⅱ期症例のうち、卵巣を温存した29症例を対象とした。術後照射の有無、卵巣の固定法、および年齢に関し、術後の卵巣機能につき検討した。なおFSHが40IU/ml以上の高値、E2が10pg/ml以下の低値を示した症例を卵巣機能が低下したと判定した。

【成績】年齢は28歳から48歳で、平均37.7歳であった。29症例中14例で術後早期に卵巣機能低下を認めた。卵巣つり上げ術を施行した16例中10例(62.5%)、未施行の13例中4例(30.8%)にそれぞれ卵巣機能低下を認めた。また術後照射の有無では、施行8例中6例(75.0%)、未施行21例中8例(38.1%)に卵巣機能低下を認めた。照射およびつり上げ術を施行していない12例中3例(25.0%)、卵巣つり上げ術を施行し照射は未施行の9例中5例(55.6%)、卵巣つり上げ術および術後照射とも施行した7例中5例(71.4%)でそれぞれ卵巣機能の低下を認めた。年齢による比較では、40歳未満の18症例中14例(77.8%)で卵巣機能が保たれたが、40歳以上の11例中10例(90.9%)で卵巣機能の低下を認めた。観察期間は2カ月から108カ月で、現在まで対象29例に再発は認めていない。

【結論】40歳未満と40歳以上の症例で術後の卵巣機能に明らかな差を認め、卵巣温存の年齢的適応を検討する必要があると考えられた。また卵巣つり上げ術施行例、および術後照射症例で卵巣機能が低下する傾向にあり、手術手技の改善や照射の際の遮蔽などの工夫が必要である。

3) 自己心膜の超短時間エポキシ処理による石灰化抑止効果

八木 伸夫・渡辺 弘
諸 久永・大関 一 (新潟大学)
林 純一 (第二外科)

【目的】心臓手術に使用する補填材料として退縮、硬化しない材質が求められており、種々の材料、処理法が

検討されている。その一つとしてエポキシ処理が近年注目されてきているが処理に長時間を要し、異種の組織しか利用できないため、反応が不完全であれば拒絶反応を招来する危険性がある。そこで拒絶されない自己心膜の石灰化予防策としての新しいエポキシ処理法を考案した。本法により手術中に短時間で処理された自己心膜が良い補填材料となりうるかを検討した。

ビーグル犬を用い、左開胸下に肺動脈壁にパッチとして以下の材料を移植した。Ⅰ群：エポキシ処理した自己心膜(EX-810原液、触媒添加、40℃、15分処理)、Ⅱ群：無処理の自己心膜、Ⅲ群：グルタルアルデヒド処理ウマ心膜。8週後に移植片を採取し、その乾燥重量あたりのカルシウム沈着量を原子吸光法で測定し、石灰化の程度を評価した。

カルシウム沈着量は以下のとおりであった。Ⅰ群： $0.245 \pm 0.140 \mu\text{g}/\text{mg}$ 、Ⅱ群： 0.706 ± 0.249 、Ⅲ群： 0.869 ± 0.111 。Ⅰ群はⅡ群、Ⅲ群に比し有意に($p < 0.01$, $p < 0.0001$)カルシウム沈着量が低値であった。組織所見に於いて、心膜外面でのリンパ球、マクロファージ等の細胞浸潤はⅠ群、Ⅱ群で少なかったがⅢ群では著明に認められた。心膜内への新生血管の侵入や線維芽細胞の侵入は、Ⅰ群、Ⅲ群で認められなかったのに対し、Ⅱ群では全例に高度に認められた。15分、40℃のエポキシ処理をした自己心膜は石灰化の少ない新たな補填材料として有効であると考えられた。

4) 形成外科領域における Minimum Invasive Surgery

—内視鏡下手術について—

橋田 直久・上條 正
飛沢 泰友・梶谷 正子
城倉 雅次・宮田 昌幸
山本 光宏・Chin Wei (新潟大学医学部附
属病院形成外科)
柴田 実 (亀田第一病院
整形外科)
渡辺 研二

現在、内視鏡下手術は広範囲に普及している。これは、低侵襲手術を実現するべく適用されていると言っても過言ではない。形成外科領域においても各分野への適応が積極的になされ、その有用性の検討がなされている。

当科でも、平成8年8月より内視鏡下手術を導入し、現在適応に関して検討中である。われわれが主に用いている内視鏡システムは、Smith and Nephew 社製 Dyonics 関節鏡システムである。

症例1は48歳女性。乳房再建を希望し当科初診となつ